

第2回 「円勝寺と聖徳太子像」

2009・8・23

～ 太子二歳立像のなぞ ～

林 田 利 之

1. 円勝寺の調査

●円勝寺の位置

円勝寺は、富里市日吉倉483に所在する天台宗のお寺です(図1)。日吉台ニュータウンの造成に伴って、近隣の地形は昭和40年代末に大きく変貌しましたが、円勝寺周辺の地形は大きく変わることなく、江戸時代以前からの様子を今に伝えていますが、円勝寺周辺の小字には「城」に関わると考えられる地名が数多く残されており、ここに戦国時代の「城(館)」があったとも推定されています。このことは、日吉倉地区が市内でも古くから人々の営みが繰り返されてきた土地であり、円勝寺が建立されることになった理由の一つとも考えられます。

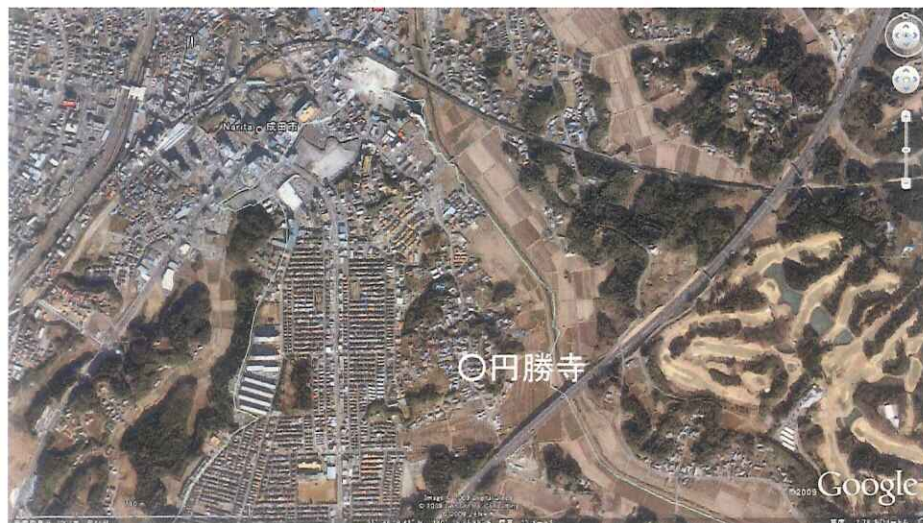


図1 円勝寺の位置

●円勝寺の歴史

富里市には新橋真乘院観音堂、久能潮音寺観音堂、そして今回ご紹介する日吉倉円勝寺太子堂の三つの堂があります。新橋の観音堂は1700年代初めに創建され、久能の観音堂は1600年代中頃の創建と推定されていますが、大正2年に刊行された『印旛郡誌』を

みると、円勝寺は本寺を成田市山之作の円融寺えんゆうじとし、寛永2(1625)年、覺珍和尚がくちん(初代)によって日吉倉に創建されたとあります。このことから、円勝寺太子堂は富里市で最も古い堂であると考えられます。同書によると、円勝寺は俊應和尚しゆんおう(17代)によって中興ちゆうこうされたと記されており、創建から170余年後には、無住の時代があった事もわかります。また、この俊應和尚は客殿、庫裏諸堂に至るまで全て新規に建立したとあることから、無住の間に寺が荒廃してしまった様子も伝えられています。

今回のテーマである、「太子像」が何時頃から円勝寺に祀られていたのかについては、山号が頼りであり、創建当時から「太子山」と称していたことをみれば、既に創建当時から太子像が円勝寺に安置されていたと考えるのが自然でしょう。

●解体調査

円勝寺の歴史を考える上で、建物の解体調査と発掘調査が行われたことはまたとない絶好の機会でした。解体調査が実施されたのは、平成4年5月25日から6月9日の約2週間で、一つ一つの部材の作りや銘などの記載、その他年代の特定につながる情報の収集を行いながら人力によって進められました(図2)。

この調査によって天井部分から発見された棟札により、この太子堂が建立されたのは円勝寺創建から155年後の、安永9(1780)年霜月である事が確認されました(図3)。また、向拝という部分の造りはその様式から19世紀前期の建築と考えられましたが、主屋自体はこれよりも古い特徴を残しており、向拝部よりは若干古い、18世紀後期に造られたものであろうと推定されました。



図2 解体調査の様子